

# 『八重葎』の姫君の真実と心象

## — 『源氏物語』の大君と浮舟の投影 —

田 村 俊 介

### 1 先行研究

疑古物語『八重葎』を初めて学界に紹介したのは鹿嶋正二氏「散佚物語「八重葎」に就いて」<sup>1</sup>であるが、それ以来、女主人公の葎の宿の姫君（「姫君」と略すこともある）の原型としてよく取り上げられて来たのは、①『狭衣』の飛鳥井女君であった。例えば、辛島正雄氏も、御論文を

「飛鳥井姫君譚の変奏的作品」とされる、その〈変奏〉のありかたを問うことが、『八重葎』という作品をよりよく理解し評価するためのひとつのポイントであるように思われる。

という立場から成して居り<sup>2</sup>、平成一四年『中世王朝物語・御伽草子事典』<sup>3</sup>では、井上真弓氏「中世王朝物語と平安時代物語」が、『八重葎』（『風葉和歌集』以後成立）も『狭衣物語』の飛鳥井女君関係のみを取り上げ、改作したものと考えられる。

と、又、塩田公子氏「話型」が、

「飛鳥井姫君型」を忠実になぞったのが『八重葎』である。

と述べている。一方、『源氏』では、②末摘花や③夕顔の物語の引用が昭和三六年の今井源衛氏古典文庫『やへむぐら』<sup>4</sup>で、指摘された。各種の文学辞（事）典<sup>5</sup>や、辻本裕成氏の『源氏』の影響箇所の一覧表<sup>6</sup>にも取り入れられて居り、なるほど、同書の解説や注の他の記述と同様すぐれた考察であった。

しかしながら、姫君の夭逝の場面、言い替えると作品全体の一歩の山場では、④大君が原型として用いられているのではないか。そもそも、②の場合、容姿は似ていないし、性格は似ていないこともないが、より目立つ共通性は葎の宿の様子や叔母の性格等周囲の状況なのであり、③の場合も、本人の性格より、男主人公・中納言の愛の言葉や追悼の場面に着目なされた。<sup>8</sup> 出典考証であり、そうした意味でも、より重要な原型は④であると思う。又、欺かれて船に乗せられるところまでは、なるほど、①を想起させるが、直接の死因が男を拒絶しながらの絶食であるのは、④に拠っているに違いない。辛島氏の響みに倣えば、総角巻後半の変奏的作品であることをまず認識し、次いで、その変奏のありかたを問うことが、『八重葎』という作品をよりよく理解するためのひとつのポイントであるように思われるのである。

尚、平成に入ってしばらくした頃から、学界では「中世王朝物語」という名称が使われ始め、「擬古物語」というのは好ましくないとされている。例えば、『中世王朝物語・御伽草子事典』の幾つかの項目でそれぞれの執筆者が説くところ、いちいちごもつともであるが、本拙稿は内容上出典考証に重きを置いていること、先学諸賢、特に今井氏の研究とのつながりを明示したいということに依り、少なくとも今回限り、古い名称を使うことをお許し頂きたい。他の物語を論じた際にも、「擬古」という言葉に否定的なニュアンスを私は込めていなかったこと、「擬古物語」と言えども新しい思想を積極的に取り入れられている点はわかっていることも合わせて付言しておく。

又、先行研究の蒐集には吉海直人氏「鎌倉時代物語研究ハンドブック（上）」、同「（下）」にたよった。「23 やへむぐら」の項に記されている「I 論文」十篇、「II 単行本」（の中の『八重葎』に関する部分）二篇、「IV 影印・翻刻」三篇、都合十五篇全てを参照することができた（「III 注釈書・現代語訳・索引」の一篇は平成十九年三月現在も未刊）。平成七年から平成十四年のものに就いては、平成十四年五月井真弓氏「中世王朝物語」主要研究文献目録」<sup>10</sup>の「24 八重葎」の項、それ以降のものに就いては国立国会図書館のインターネットの雑誌記事索引（平成十九年三月に検索）を参照させて頂いた。

## 2 姫君の真実と大君

物語第一年の九月、葎の宿の姫君は、中納言と初めて契りを結んだが、物語第二年の二月、中納言は、発病した母の看病のため、葎の宿

へは途絶えがちになった。ちょうどその頃、葎の宿では、姫君の叔母が、大弐の北の方となる。夫の赴任先である太宰府へ向かうことになった叔母は、今迄実子同然に養育して来た姫君も連れて行き、大弐の息子・民部大輔と結婚させようと企む。勿論姫君は、今迄通り葎の宿に残って、中納言を待ち続けるつもりであったのだが、「見送つてほしい」という叔母の懇願に負けて、難波迄は同行する。結局、斯かれて、瀬戸内海を西行する船に乗せられ「さは（叔母ガ私ヲ）たばかり給ふにこそ」と気付いた（114頁11行目）<sup>11</sup>時には遅かったのであるが、更に悪いことに、明石へ寄港し他の人々が船を離れたすきに、「みんぶのたゆふ」（民部大輔）が契りを迫つて来るのであった。姫君は死を決意し、食を断つ。姫君の変調に気付いた周囲は、加持祈祷のため難波まで引き返すのであるが、その場面は次のように記述されている。

へ『八重葎』〔1〕  
其わたりさるべき御いのりの僧、こゝかしこより求めいで、加持参らせ騒ぐ。物の怪などにて、とみに取り入りたる御心地にもあらず、物聞こしめさで、日頃に弱く成り給へば、何のかひなし。

（129頁）

これは、『源氏物語』宇治十帖前半の女主人公・大君の絶食の記述と酷似している。

へ『源氏』〔1〕  
〳

老女房「…物をなむさらに聞こしめさぬ。もとより、人に似たまはずあえかにおはします中に…はかなき御くだものだに御覧じ入れざりしつもりや、あさましく弱くなりましたまひて、さらにたのむべくも見えたまはず。…」（略）（薫八）所どころに御祈祷いのりの使出いだしたてさせたまひ、…祭、祓、よろづにいたらぬことなくしたまへど、物の罪めきたる御病にもあらざりければ、何の験しるしも見えず。

（「総角」。第五分冊316く323頁）<sup>12</sup>

『源氏物語』前編では幾人かの女性が六条御息所の生霊・死霊に苦しめられたが、そのような病ではないというのが「物の罪めきたる御病にもあらざりければ」である。これと吻合する『八重葎』の措辞が「物の怪などにて、とみに取り入りたる御心地にもあらず」である。その結果、「何の験も見えず」、「何のかひなし」ということになる。

次に、いよいよ本当に死ぬ瞬間も、両作品の間には、共通する語句がある。

〈『源氏』[2]〉

世の中をことさらに厭ひ離れねとすすめたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにもの枯れゆくやうにて、消えはてたまひぬるはいみじきわざかな。

(328頁7行目～10行目)

〈『八重葎』[2]〉

叔母君つと添ひおはして、「いみじきことかな。目をだに見開け給へ。…」など、たゞ泣きに泣きて聞こえ給へど、いらへもえし給はず。かくして二日といふ明け暮れに、消えはて給ひぬ。北の方、いみじとまどひ給ふこと、言はん方なし。

(129～130頁)

人の死を「消えはつ」という複合動詞で表わす例は、『源氏』全体で、二つしかない。しかも、もう一例の紫上の場合には三十代から病弱であった末の四十代での死であり、それにもかかわらず、残された光源氏の悲しみは一年以上の長きに亙ることは互るのであるが、死の瞬間の驚愕という点では、大君の二十代の死のほうが上回っているのではないか。残された者のそのような驚愕を代弁するため、「いみじ」という形容詞が二回使われている。葎の宿の姫君の十代の死の記述にも「いみじ」という形容詞が二回、そして「消えはつ」という複合動詞が使われている。

より一層強い吻合はその後の描写に見られる。

〈『源氏』[3]〉

ただ寝給へるやうにて、変りたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへるを、かくながら、虫の殻のやうにても見るわざならましかばと思ひまどふ。今はのことどもするに、御髪をかきやるに、さとうち匂ひたる、ただありながらの匂ひになつかしうかうばしきも、…

(329頁3行目～7行目)

へ『八重葎』[3]く

むつかしげにも見えず、いときよらにらうたげにて、たゞ寝入りたらむ人のさまして、さゝやかに臥し給へるを見る心地ども、あたらしともなかなかなり。大弐もよゝと泣きぬ。民部の大夫たゆに言ひ合はせて、むなしき殻を取り出づる程、ある限り泣きのゝしる。この人はましてせきとめん方なく、かくながらだに見る世の中の習ひもがなと胸もひしげて思へり。

(1330頁2く7行目)

二重実線部では、『源氏』の場合嗅覚に重点を置いた描写であり、『八重葎』はもっぱら視覚的な描写であるという違いはあるものの、どちらも、死後の変化が無いという内容である。実線部ではそのことを、「寝ているようだ」と直喩表現している。点線部に就いて言えば、「うつくしげなり」等の「うつくし」類と「らうたげなり」等の「らうたし」類とは平安中期には厳密に使い分けられていたのに対し、管見に入った擬古物語等では「らうたし」類が「うつくし」類の元義に近い意味で使われるようになってきている。参考までに『いはでしのぶ(抜書本)』の中で、大君の死が物語取りされている箇所でも、

たゞ寝たるやうなる御顔つきの、常よりことにらうたくをかしげにて

(328く329頁)<sup>13</sup>

と、「らうたし」という形容詞が使われている。このような、現代語の「かわいい」ままの女性を、たとえ生き返らなくとも、ずっと見ていたいと、恋する男が真剣に願うのが、両作品の網掛けの部分である。

以上、『八重葎』が大君の死を物語取りしたことを実証したが、一方では、重大な相違点もある。『源氏物語』の大君は、男主人公・薫の愛を信じ切れず、迫られても契りを拒否し、食を絶つという理不尽な死<sup>14</sup>であったのに対し、『八重葎』の姫君は、男主人公・中納言との愛を貫き通すため、別の男・民部大輔に迫られた時契りを拒否し、食を絶つた。叔母の斯きと「一人合点」な押し付け<sup>15</sup>に対する抗議の死とも言えよう。だからこの擬古物語は『源氏物語』を超えた、と断定してしまうと言い過ぎの誇りを受けようが、少なくとも、『八重葎』の姫君のほう総角巻の大君よりも愛情溢れる女性だったというのは動かしがたい真実なのではあるまいか。

3 姫君の心象イメージと浮舟

にもかかわらず、中納言が姫君の愛の強さをそれ程には感じ取らずもう一つ信じ切っていなかったのは、誠に頑迷であり、『徒然草』ばかりの女性蔑視<sup>16</sup>から脱け出せなかったという他ない。結局はこの世での最後の逢瀬となつてしまつた物語第二年の一月、

枕の程に、箏の琴の端少し見ゆれば、およびて引き寄せ給ひて、「この物よ、まろが仲だちなめり。いとむつまじう思ふべきを、又、いかならん人をかひき入れましと思ふぞうしろめたき」と、ほく笑みて聞こえ給ふに、女、いみじう恥づかしと思ふ。

(88頁)

という場面がある。「まろが仲だち」というのは、物語第一年の九月、姫君の弾く箏の琴に魅かれて、自分から葎の宿に押し入つたという経緯に由来する中納言の物言いである。また今度、姫君が箏の琴を演奏すれば自分以外の男も葎の宿に押し入るだろうというのが「いかならん人をかひき入れまし」である。例えば、帚木巻の「琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける」「木枯こがらしに吹きあはすめる笛の音をひきとどむべきことの葉ぞなき」(第一分冊79頁)という贈答歌の「ひきとめ」「ひきとどむ」には「弾きとめ」「弾きとどむ」に「(異性ヲ)引きとめ」「(異性ヲ)引きとどむ」が掛けられていると同様、この「ひき入れ」には「弾き入れ」に「イカナラム人ヲひき入れ」が掛けられている。葎の宿は、上の品のお嬢様の豪邸のように守りが固いということはなく、外部からの侵入が容易であつたのも自分自身体験済みだから、ついこのように思つてしまつたのだろう。しかしながら、「うしろめた」く思わせるような言動は姫君の側にも一つも無いのだから、中納言の発言は非礼という他無い。同じ春、姫君の死を知らされた直後も、やはり、次のように思つてしまつている。大式と聞けば、その子の大夫たゆか(葎ノ宿八)懸想し寄らんに、難かるべき住まひかは。みづからの本性、はた、やはらかになつかしうて、強き所は無かりきかし。いかに(民部大輔二)思ひ懸けられて、はふれ行きけん。あはれと思ひしかば、さりとて、我を忘るゝにはあらぬものから、心の外にこそ率てゆかれつらめ。

(135頁)

民部大輔が葎の宿の姫君を初めて見たのは船の中であつたから、「葎の宿に寄つたとしたら、難なく侵入できたのではないか。きつとそうだろう」と想像しているのは明らかに的はずれである。加えて、姫君の内面に「強き所」が無い、だから民部大輔の懸想に靡いてしまつた

かのように想像しているのも誤りである。中納言が姫君の死の詳しい事情を、姫君の後を追って入水未遂までした忠実な女房・侍従に会って、ようやく正確に知り得たのは、物語第二年の八月であった。

疑はしき方の混じりし時に飽かぬ別れの一筋はいみじう思したりしを、多くは我が情けに消えける命の程と聞こしめす心地、うつつともおぼえ給はねど、御袖の雫はよゝと落ちけり。

(159頁)

現代語訳を試みると、「姫君の気持ちを疑っていた時でさえ、嫌いになつて別れたのではないので、死をひどく悲しくお思いになつていたのでから、まして、多くは自分がかけてやった情けを重んじて命を失つたのだとお聞きになつたばかりの今の気持ちは、現実だとはお感じになれないけれど、袖の雫はしとどに濡れてぼたぼたと地面に落ちるのだった」のようになろう。この記述からは、しかし、姫君の死から四、五ヶ月間は、中納言の頭の中に「疑はしき方の混じり」<sup>イメージ</sup> っていたこともわかつてしまふのである。

以上のような中納言の心象に合わせて物語取りされた、葎の宿の姫君の原型が、最初の愛を貫き通せず別の男に靡いた⑤浮舟である。中納言が姫君を追悼する

へ『八重葎』「4」

御前の橘のいとなつかしうち薫るを避きて、ほとゝぎすの、いづち行くらん、忙しげに鳴き捨てゝ過ぐるも、この頃は常よりあはれに耳留まりて、ふと

ほとゝぎす恋ふると告げよなき人に

死出の田長と名には立たずや

と、思ふこととて言はれ給ふ

(143頁)

という場面は、蜻蛉巻で薫が浮舟を追悼する

へ『源氏』「4」

御前近き橘の香のなつかしきに、ほととぎすの二声ばかり鳴きてわたる。薫「宿に通はば」(※)と独りごちたまふ。

(※)「なき人の宿に通はばほととぎすかけて音にのみ鳴くと告げなむ」(古今・哀傷読人しらず)に想到。

(第六分冊223頁)

を踏まえているとしか思えない。八代集その他『八重葎』が影響を受けていそうな作品の中から、「ほととぎす」を歌材にした哀傷歌を抜き出してみたが、へ『源氏』「4」へ以上へ『八重葎』「4」へに似ているものは見つからなかった。幻巻には、

花橘月影にいときはやかに見ゆる、かをりも追風なつかしければ(この箇所、新全集の句読を改めた。昭和六三年7月『国語国文』所収の拙稿「雪と月——総角巻末薫独詠連作段落の再評価——」参照)

という自然描写のしばらく後に、

待たれつるほととぎすのほのかにうち鳴きたるも、「いかに知りてか」(※)と、聞く人(≡光源氏)ただならず。

源氏なき人をしのぶる宵のむら雨に濡れてや来つる山ほととぎす

とて、いとど空をながめたまふ。大将(≡夕霧)、

夕霧ほととぎす君につてなんふるさとの花橘 はなたちばなは今ぞさかりと

(※)「いにしへのこと語らへばほととぎすいかに知りてか古声のする」(古今六帖・五)による。

(第四分冊。539〜542頁)<sup>17</sup>

という紫上追悼の場面もあるが、それ程には似ていない。夕霧の詠歌に関して、

「君」は亡き紫の上。その亡き人に伝えてくれと、冥土と往来するほととぎすに呼びかける歌。「花橘」は、「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今・夏 読人しらず)による。参考「なき人の宿に通はばほととぎすかけて音にのみ鳴くと告げなむ」(古今・哀傷 読人しらず)。

という頭注が施されていて注目されることはされるのであるが、義理の息子であるという立場上、かつての野分の朝に垣間見して胸をときめかせた体験があるだけにかえって、追慕や悲しみの感情を抑えた詠みぶりになっている。契りを重ねた夫が、妻の失踪と死を知らされた春の直後の夏であるにもかかわらず、通りすがりのほととぎすに伝言を頼む点、『八重葎』は蜻蛉巻と排他的に共通するのである。

#### 4 その他の原型

⑤浮舟とよく似た女性は、『源氏物語』の中では、③夕顔がいる。③夕顔の物語の引用に就いては、本拙稿第1節で触れた通り、今井氏が指摘なさっている。

物語第二年八月、姫君付きの女房であつた侍従とともに中納言が姫君を偲ぶくだりは、夕顔付きの女房であつた右近とともに光源氏が夕顔を偲ぶくだりを踏まえて居り、又、物語第一年冬、中納言が姫君と愛し合うくだり、

「いかで名のりし給へ。かばかりに成りぬれば、いかなりともおろかに思ふべき中の契りかは」と、ゆかしがり給ふに、忍び過ぐすべきにはあらねど、言ひ出でむことのつゝまじう恥づかしければ、「木の丸殿に侍らばこそ」と言ふも、はかなだちてをかし。

(77～78頁)

は、光源氏が夕顔と愛し合うくだり、

源氏「…今だに名のりしたまへ。いとむくつけし」とのたまへど、女「海人の子なれば」(※)とて、さすがにうちとけぬさまいとあいだれたり。

(※)「白波の寄する渚に世を過ぐす海人 あまの子なれば宿も定めず」(和漢朗詠集・巻下・遊女)。落ちぶれた身分の者ですから申し上げません。…。

(第一分冊162頁)

を踏まえている、という注が施されている<sup>18</sup>。

これらのうち、夕顔が口ずさんだ「海人の子なれば」に関連して、原岡文子氏『源氏物語 両義の糸』<sup>19</sup>「二 遊女・巫女・夕顔―夕顔の巻をめぐつて―」では次のように述べられている。

さて、「海人の子」とは何か。宿も定めぬ漂泊の中に世（夜）を過ごすものとしての遊女のイメージが浮かび上がるのは偶然ではない。「白波の寄する渚に……」の歌は、『和漢朗詠集』『遊女』の項に収められたものだった。後に触れるが、「定まれる居なく、当る家なし」(※)と述べられる漂泊者としての遊女は、同じくさすらいの巫女の後裔であるという。

(※)『傀儡子記』岩波思想大系本、一五八頁。女の傀儡子の実体は、遊女と変わらぬものであったとされる。

(36頁)

しかしながら、『八重葎』では、男主人公の「かばかりに成りぬれば」「いかで名のりし給へ」という懇願が、光源氏の「今だに名のりしたまへ」と全く同内容であるにもかかわらず、女主人公の答えは「木の丸殿に侍らばこそ」であった。従って、男主人公の懇願を上手に断る歌語的表現<sup>20</sup>という点では共通することになるにもかかわらず、「遊女のイメージ」だけは物語取りされなかったのである。

## 5 結語

『八重葎』全体の特長に就いて、今井氏は、

八重葎もまた「忍音」などの系譜に立つ作品である事はいうまでもない。この作品も、それらの例に漏れず、一言でいえば源氏や狭衣など古典の切り継ぎにすぎない。しかし、他の擬古物語の多くは、全くの切り継ぎに終始して、作品としての主体性も個性も持っていない場合が多いのに反して、この作品では、ともかくも作品としての統一性を保っており、とくに性格表現などにおいて、類型に墮し切らず、状況に応じた個性的表現に成功しているのは、珍とすべきである。

と述べているが、女主人公が話題になる部分も勿論例外でなく、作者は教養の広さを活かして、先行物語の様々な女性が登場したり話題になったりする部分を十分に読みこなし、その詞章を正確に記憶した上で、「状況に応じ」て取り込んでいる。これは例えば、『源氏物語』後

編で薫が出生の不安の心象風景である霧に包まれ乍ら宇治へ向かうくだりの詞章も、『源氏』前編で光源氏が藤壺との不毛な恋に苦しみ乍ら雲林院に籠るくだりの詞章も「切り継」いで、主人公・兵部卿宮が女主人公・山里の姫君を訪れる物語を書き綴った『小夜衣』作者とは大違いである。『小夜衣』上巻の兵部卿宮は出生の不安とも不倫の恋とも全く無縁だからだ。『八重葎』作者のほうが遙かに『源氏』への造詣が深く、書き綴り方がこまやかだということを明らかにするために、本拙稿はほんの少しでも従来の研究に付け加えるところがあったとすれば幸いである。

しかしながら、いくら様々な先蹤と言っても、大事な原型は唯一人である。

葎の宿の姫君をよくは知らない作中人物達の発言等の喚起する心象にまどわされると、作者自身が造型しようとした姫君像を見失ってしまふ危険も出て来る。この作品をよりよく理解し評価するためのポイントは、まず総角巻を『八重葎』の作者に負けぬ程充分に読みこなし、大君の人間像を念頭に置くこと、そして、総角巻の〈変奏〉のありかたを問い、大君の死の目的との違いを知ることであるように思われる。

## 注

- (1) 『国語国文』四巻7号、昭和九年七月。
- (2) 『八重葎』物語覚書―中世物語における『狭衣物語』受容の問題と『八重葎』の位置―。『文学研究』82所収昭和六〇年三月。
- (3) 勉誠出版。
- (4) 先行文学の影響は「やへむぐら解題」と「附注」とに記されている。再録である『王朝末期物語論』（昭和六一年）第六章も参照させて頂いた。
- (5) 岩波書店『日本古典文学大辞典』（昭和六〇年）「八重葎」（中野幸一氏執筆）等。
- (6) 「王朝末期物語における源氏物語の影響箇所一覧」。『調査研究報告』17所収、平成八年三月。
- (7) 解題二三頁、(a) 及び (b)。注五九、注七二。
- (8) 解題二四頁、(e)。注一〇二、注三六三。
- (9) 『同志社女子大学学術研究年報』四五(4)（平成六年）、四六(4)（平成七年）所収。
- (10) 『平安文学論究』所収。

- (11) 『八重律』の引用は、今井源衛氏『やへむぐら』（古典文庫、一九六一年）に、適宜、漢字を宛てたり活用語尾を補ったりしたものに拠る。
- (12) 『源氏物語』の引用は、新全集本全六冊（平成六年～平成一〇年）に拠る。
- (13) 『いはでしのぶ（抜書本）』の引用は、前記『鎌倉時代物語集成』第二卷（平成元年）所収の本文（底本は三条西家蔵本）に拠る。注6の一覧表を参照した。
- (14) ずっと後の手習巻に拠れば、大君は物怪に取り憑かれて死んだとされていて、「『源氏』（一）」の「物の罪めきたる御病にもあらざりければ」と明らかに矛盾する。紫式部が、手習巻の時点では、大君の死の意義を否定、若しくは相対化しようという意志の表われであると思う。藤村潔氏『源氏物語の研究』（昭和五五）所収「源氏物語の物怪について」、拙稿「光源氏物語現行形態試論第七―長編始発説の意義―」（『富山大学人文学部紀要』三六号、平成一四年三月）等参照。
- (15) 石津はるみ氏「やへむぐら」（『国文学解釈と鑑賞』第45巻1号、昭和五五年一月）には、姪の幸福を思う叔母の一人合点から孤立していく女主人公は宇治十帖の女性や狭衣物語の飛鳥井女君を髣髴させると書かれている。
- (16) 例えば、第九十段の女性蔑視論は「結婚否定論である。もともと、論というには一方的なきめつけが多く、…その独断と偏見ぶりに啞然とさせられよう。」と言われている。三木紀人氏講談社学術文庫『徒然草』（四）（昭和五七年）。
- (17) ※印は新全集の頭注である。以下同様。
- (18) 注8に同じ。
- (19) 平成三年発行。※印も原岡氏。
- (20) 「木の丸殿」という表現、それに関連する説話の伝承に就いては、福島尚氏「神楽歌「朝倉」の起源説話再考―その生成と伝承の展開について―」（平成一三年『論集 説話と説話集』所収）が大変参考になった。

（付記） 本稿をなすにあたっては、平成十一年七月より約一年半かかって読了した本物語の講読での成果によるところが大きい。いまだその成果を『源氏物語』引用の面ではしか反映させていないことを遺憾とするが、なお精密な読解を心がけたい。輪読に熱心に参加してくれた学生諸君に、心からお礼申し上げます。